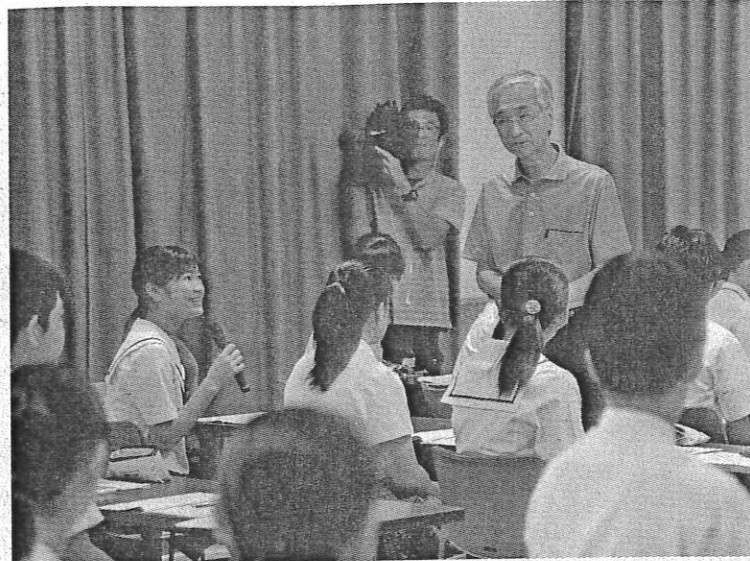


災害時の避難所生活

子ども笑顔が力に

田辺中高生が体験聞く

田辺市内の中学校と高校から生徒が集い、防災をテーマに交流する「ぼっさい未来学校」が23日、同市神子浜1丁目の東部公民館であった。2011年の東日本大震災で被災した元高校長と当時小学5年生だった男性の2人が講演し、避難所体験から「生徒の声掛けや笑顔が避難者の心の支えになった」と強調した。



出席した生徒の意見を聞きながら話を進める齋藤幸男さん
(23日、田辺市神子浜1丁目で)

生徒らの災害を生き抜く力」教育委員会が毎年開催し、4や主体性を高め合おうと同市「回目。中学校14校と高校2校

から約50人が参加した。午前中は宮城県石巻西高校の元校長・齋藤幸男さん、同県東松島市出身の大学1年生で「16歳の語り部」の著者、雁部那由多さんの2人が「避難所運営とこころのケア」をテーマに講演した。雁部さんは「悲惨な被災体験を心にしまい、学校では震災の話はしなかった。児童から表情が消えた」と、つらい日々を振り返った。しかし、中学生の時にシンポジウムで「震災体験は伝えることで人の命を救う力を持っている」との発言を聞き、語り部になる契機になったと話した。また、「1日一つの思い出をつくり、毎日1行日記をつけている。震災前の思い出もあるにはあったが、日常的す

ぎて思い出せなかった」と説明。1行日記につづった思い出の積み重ねが心の支えになっていると語った。齋藤さんは、校長をしていた高校が避難所になり、安定した運営ができるようになるまでの様子を説明。トイレの見回りなど生徒が自主的に動いてくれたと述べ、「子らの『大丈夫ですよ』の声掛けが被災者の生きる力になった」と生徒らの存在の大きさを強調。生徒らの笑顔で、自身も心が折れそうになっていたのを助けられたとも述べた。講演を聞いた衣笠中学校2年の和田祐介君は「もし避難所にいることになれば積極的に活動したい」、田辺工業高校2年の九里葵さんは「1日一つの思い出をつくることの意味を知った。1行日記を実践したい」などと述べ、それぞれ地域の力となれるよう誓いを新たにした。当日は避難所運営ゲームなども体験した。